

研究ノート

人間と犬がともに暮らすための環境整備 —— 盲導犬普及に向けたハード面からの支援 ——

壽崎かすみ*

Design for comfortable life both human and dogs Supporting a life with a guide dog

SUSAKI Kasumi*

This paper shows some of the reason why using guidedog does not become popular in Japan compared to U.K. and etc. Reasons which are said by trainer of guide dogs is very software oriented of social system and in this paper some other reasons which depend design issue of houses, hospital and etc. And also shows design issues are supposed to oriented mental issue historical Japanese relationship with dogs.

1. はじめに

現在日本では、盲導犬、聴導犬、介助犬の3種が補助犬として法律上位置付けられており、盲導犬1067頭、介助犬53頭、聴導犬29頭（2011年8月1日現在、厚生労働省「補助犬情報」（厚労省、2011））が実際にユーザーとともに生活し、その支えとなっている。しかし、この数字は欧米の補助犬利用が進んでいる国と比べると桁違いに少ない。

本稿では、3種の補助犬の中では日本での利用者数が最も多い「盲導犬」をとりあげ、その普及を阻む要因について調査した結果を報告する。

犬を盲導犬として利用することは「犬の虐待」であるという主張もあるが、この点についてはここでは触れない。

なお、この2010年度国際社会文化研究所の研究助成を受けての研究成果は、2011年度日本福祉のまちづくり学会大会（8月）で発表した。また2011年度都市住宅学会年次大会（12月）に発表予定である。本稿はこれらの発表で詳しい報告をしていない盲導犬育成団体訓練センターの調査を中心に述べる。

2. 盲導犬の育成

2.1 盲導犬育成団体

日本に盲導犬の育成にあたっている団体は9団体ある。「公益財団法人」が「北海道盲導犬協会」、「東日本盲導犬協会」、「日本盲導犬協会」、「関西盲導犬協会」、「九州盲導犬協会」の5団体、

* 龍谷大学国際文化学部

「財団法人」が「アイメイト協会」、「中部盲導犬協会」、そして「社会福祉法人」の「日本ライトハウス」、「兵庫盲導犬協会」の2団体である（全日本盲導犬使用者の会，2011）。盲導犬は、聴導犬・介助犬とは異なり、国家公安委員会の指定を受けた団体が盲導犬を育成し、認定を行うことになっている。

盲導犬の育成にあたっている各団体はそれぞれ、訓練施設をもち、訓練士が候補犬の訓練にあたる。「盲導犬訓練士」を職業とするための国家資格等はない。訓練士の育成機関としては、日本盲導犬協会の神奈川訓練センターに「盲導犬訓練士学校」が併設されているのみである。他は、いずれかの団体の盲導犬訓練センターに職を得て、OJTで徒弟制度のような形で訓練方法を学び、一人前の訓練士となる。

2.2 盲導犬訓練センター

盲導犬が普及しない理由について、盲導犬育成団体である、日本盲導犬協会（日本盲導犬協会，2011）、関西盲導犬協会（関西盲導犬協会，2011）の2団体について、それぞれの団体の盲導犬訓練センターで開催された説明会に参加して説明を聞き、さらに担当者にはアヒアヒングを行った。

(1) 日本盲導犬協会神奈川訓練センター

日本盲導犬協会神奈川訓練センターは、港北ニュータウンにあり、横浜市営地下鉄の駅から徒歩圏にある。周囲は住宅地である。港北ニュータウンでは設計時の方針で公共緑地を、住宅街の中にしっかり確保した。センターはこの緑地に沿ったところに立地している。2011年1月に開催された日本盲導犬協会神奈川訓練センター併設の、「盲導犬訓練士学校」の説明会に参加した。

当日は、デモンストレーションに使用した部屋と、デモンストレーション以外は撮影禁止であった。デモンストレーションに使われた部屋は、普段は盲導犬候補犬の屋内運動場犬訓練場として使用する部屋であるということであった。施設内の見学もプログラムに組込まれており、一通り見学させていただいた。

盲導犬とユーザーの共同訓練期間中にユーザーが貸与される盲導犬とともに宿泊する宿泊施設（個室）、食堂、盲導犬訓練センター事務室の他、訓練士による訓練中の候補犬の居室である犬舎、獣医が待機する医務室、犬のシャンプーやブラッシングをするコーナーなどがゆったりとつくられ



写真1 神奈川訓練センター入口



写真2 屋内の訓練施設でのデモンストレーション



写真 3 犬舎（施設の外から撮影）



写真 4 犬舎（施設の外から撮影）

ていた。屋外にも訓練のスペースがあり、犬を移動させるための自動車が停められていた。屋外の訓練スペースはコンクリートがうってあり、多和田悟氏が登場する NHK 番組の DVD「プロフェッショナル 仕事の流儀 イヌは人生のパートナー 盲導犬訓練士 多和田悟の仕事」（NHK エンタープライズ）に出てくるとおりであった。使用する犬と訓練士の数のわりに狭く感じられた。

候補犬が暮らすケージの掃除、候補犬のシャンプー、ブラッシングなどの日常の世話は、職員のほか、多数のボランティアに支えられているということであった。

訓練センターの設計にあたり、盲導犬の候補犬という犬の訓練を前提にしたことがあるかどうか尋ねたが、具体的な答えは返ってこなかった。

訓練センターの門を出て道路を渡ると、港北ニュータウンの緑地という立地を活かし、候補犬の散歩コースとして使っていることは、説明会の帰路、散歩中の候補犬と訓練士学校の学生に会ったことから想像できた。学生の部屋は、事務室の隣に設けられていた。学生は、高校卒業後、すぐに入学した学生、大学を卒業して入学した学生、さらには、社会人経験者まで、年代も幅広かった。訓練士としての適性に、犬を飼育した経験の有無は関係ないという説明であった。

訓練士学校の指導員兼盲導犬訓練士に盲導犬が普及しない理由について尋ねたところ、「盲導犬に対する認知度が低いこと」、「盲導犬訓練士に中堅となる年代が少なく、訓練士希望者の指導と、実際の盲導犬訓練の2つの仕事に対して訓練士が不足しており、その結果、育成できる盲導犬の頭数が限られること」があげられた。

さらに、盲導犬は血統が大切であるので、盲導犬として優秀な血統の犬の繁殖も課題ということであった。

繁殖のために、日本盲導犬協会は、富士山麓に「富士ハーネス」と名付けた施設を設けている。この施設は盲導犬の繁殖施設としてのみならず、高齢になり、盲導犬を隠退した「リタイア犬」が老後を過ごす施設、そして盲導犬普及のため常時、一般の人が見学できる施設として使用されている。

神奈川訓練センターの施設で、犬の動き・動線、健康面を考えて建設時に特に工夫したのは、屋内運動場として使用している部屋の床、犬舎のしきりかた、犬の医務室、シャワー・シャンプーコーナー、犬のおもちゃなどを置いているコーナーの動線設計程度ということだった。

犬舎の仕切り方等も、はじめの設計では使いにくいため、改装工事をして現在の形になったとい



写真5 訓練センター 遠景

う、この施設での経験をもとにした工夫ということであった。

また、神奈川訓練センターを利用しはじめたのち、職員が常駐する事務室から犬舎が遠く、見通しが悪いという不都合があることがわかり、この職員の事務室と犬舎の位置関係は、神奈川訓練センターのあとに建てた島根訓練センターで改善したとのことだった。

現在の神奈川訓練センターが建設される以前は、古い戸建て家屋を訓練所として使用しており、物理的に大変な状況であったという話だった。

たので、日本にはこの類の施設の設計ノウハウは蓄積されていないものと予測できる。

実際、富士ハーネスは、初見氏の設計であるが、他の施設はゼネコンの設計部によるもので、盲導犬訓練施設という施設設計になれた設計者がいるのかどうかもわからないということだった。

(2) 関西盲導犬協会訓練センター

京都府亀岡市にある関西盲導犬協会の訓練センターをたずねた。亀岡の駅を降りると雪が積もっていた。亀岡駅から訓練センターのバスでセンターに着いた。2011年1月に開催された一般向けの関西盲導犬協会の施設公開の日に参加した。

訓練センターの屋外には、自動車教習所の練習用道路のように、盲導犬との歩行訓練に使うと思われる道路が造ってあったが、この日は雪がかぶっていた。説明会に使用したラウンジのほか、盲導犬候補犬のケージ、盲導犬ユーザー



写真6 関西盲導犬センター屋外



写真7 関西盲導犬センター屋外



写真8 建物外観



写真9 屋外訓練場でのデモンストレーション



写真10 屋内デモンストレーション



写真11 宿泊施設



写真12 宿泊施設

(写真11と写真12は同一の部屋を角度を変えて撮影したもの)

との共同訓練のための宿泊施設、食堂兼ミーティングルームなどがあった。

訓練士他職員の数がないため、盲導犬候補犬の訓練は数日に1度、この日のように雪が降ったときなどは、屋外の屋根のあるスペースを使用するということだった。

屋外の屋根のあるスペース(写真9)は、アスファルトの上に砂利が敷いてあり、3方を建物の壁に面している。開口部を出たところは、写真のとおり駐車スペースとして使われていた。雪が積もる時期などは、駐車場に使うのではないかと推測される。

写真6、写真7に示したスペースが歩行訓練用とすると、日本盲導犬訓練センターの屋外訓練場にあたるスペースは無いことになる。

施設のまわりは山と人家で、候補犬の散歩等にどこを利用するのも疑問であった。屋内に訓練スペースはなく、階段の乗降のデモンストレーションは、説明会に使用されたラウンジから犬舎に向かう廊下の階段を利用して行われた(写真10)。階段奥の左手に犬舎があり、広い部屋でゲージがびっしりと並べられているように見えた。その右手が事務室等、2階が共同訓練の際の宿泊施設等になっていた。

宿泊施設(写真11、写真12)は日本盲導犬協会の神奈川訓練センターと面積等、造作、設置されている家具など大差ないように見えた。



写真 13 犬のシャンプー台



写真 14 犬の糞尿処理設備

関西盲導犬訓練センターから盲導犬を貸与されている盲導犬ユーザーが、自分の盲導犬を連れて説明会のときに自身の話をし、またそのあとの時間帯に自由な質問に答えていた。盲導犬と外出した折に、盲導犬に迷子にされ携帯電話で娘さんを呼び、自分を探してもらったという話を笑い話のようにしていた。

盲導犬が普及しない理由について、訓練センターの担当者は、盲導犬の認知度が低い、盲導犬の世話はユーザー、つまり視覚障がい者自身がしなければならず、負担になることなどをあげていた。

説明会最初にデモンストレーションをしたデモンストレーション犬（盲導犬としての訓練を受け、盲導犬のデモンストレーション用に訓練センターで飼育されている犬）が説明にあたった訓練士の指示に従わないシーンが見られるなど、疑問が残った。

施設の設計については、あまり聞くことができなかった。犬舎も手狭に見えた。関西盲導犬協会もボランティアは募集しているが、亀岡駅から送迎バスで説明会に参加した交通事情を考えると、ボランティアを集めやすい立地という点では、日本盲導犬協会の神奈川訓練センターに軍配が上がる。

2.3 まとめ

一般向けの説明会を訓練施設を利用して開催している育成団体であることと、開催される日程の都合で、訪問できたのは関西盲導犬協会の訓練センターと、日本で唯一、訓練士学校を併設する日本盲導犬協会の神奈川訓練センターのみとなった。

兵庫盲導犬協会、中部盲導犬協会は協会の訓練センターを使っの一般向けの説明会等は、各協会の WEB ページで確認した範囲では開催予定がなかった。

また、訓練士は「盲導犬の認知度が低い」など、ソフト面についての問題に対する意識が強い傾向があるらしいことが2か所の訪問でわかったことから、訓練士等へのヒアリングはここまでとした。

盲導犬が普及しない理由として、訪問した2か所の訓練センターで盲導犬の認知度が低いことがあげられたほか、日常の世話が盲導犬ユーザーにとっては大変であること、訓練士育成の問題があげられるにとどまった。

3. 盲導犬と使用者

3.1 盲導犬を使用するうえでのトラブル

全日本盲導犬使用者の会の HP（全日本盲導犬使用者の会，2011）を見ると，盲導犬を使用するうえでのトラブルとしてまず，入店拒否が掲載されている。特に飲食店での入店拒否はいまだに多いようである。

医療機関の盲導犬の扱いにも問題があることが全日本盲導犬使用者の会のメーリング・リスト「guidedog_ml」への投稿内容からわかった。特に腎臓透析など定期的かつ時間のかかる治療を要する盲導犬使用者の場合，医療機関の受け入れ態勢は大きな問題であることがわかった。2011 年 10 月 5 日に「guidedog_ml」に投稿された記事によると，情報提供のあった全国の総合病院 62 件のうち，診察，治療等で病院を利用する場合に盲導犬を同伴することが可能かどうかについて，「入口」93.5%，「受付」90.3% であり，「診察室」61.3%，「処置室・透析室・検査室・リハビリ室等」22.6% である。つまり，ユーザーが盲導犬とともに「診察室」まで移動することを認めている病院は約 6 割ということになる。

この調査は，「guidedog_ml」を使用して行っているもので，はじめから「盲導犬お断り」の病院は対象にされていないと考えられる。また，ユーザーが診察や治療を受ける間，盲導犬はどこで，どのような形で待つことになるのかについてはここでは調査されていない。しかし，盲導犬にとって適切な待合室が用意されているとは考えにくい。

人為的な問題ではないが，日本海側をはじめとし，多雪地帯で盲導犬を利用しているユーザーは，雪道を歩く際に，犬の歩調との関係で滑りやすく，雪道を滑らずに歩くために靴に簡単に装着できる滑り止めの情報（販売先，値段等）も交換されていた。この滑り止めを購入し，犬（家庭犬として飼育している柴犬）の散歩の際に使用してみたが，装着が簡単なわりにはずれにくく，使いやすかった。「guidedog_ml」には雪道でいつもと道路の状況が変わること，迂回路等が設定される場合があることへの不安も投稿されていた。

盲導犬を同伴して鉄道，バス等に乗車することについての記事は思うほど，見つけることができなかった。鉄道の駅で，車椅子利用者が電車の乗り降りをすることは頻繁に見かけるようになったが，盲導犬を同伴しての利用者は，滋賀，京都，大阪で日常的に利用する範囲では見かけたことがない。これは，単なる利用者の数の違いなのか，盲導犬を同伴して鉄道を利用することが車椅子での利用以上に敷居が高いことなのか，判断しかねる。

また，盲導犬を通勤に使用する場合，勤務先に盲導犬を待たせる場所がない場合も多く，盲導犬使用者の悩みの種となっているようである。

盲導犬を使用して外出する，その行先の受け入れ態勢が整わないことが，盲導犬が普及しない大きな理由のひとつとも考えられる。

3.2 盲導犬と使用者

メーリング・リスト「guidedog_ml」への投稿記事を見ていて感じたこととしては，盲導犬を一度利用すると，その盲導犬がリタイアしたのちも，次の盲導犬を使用する人が少なくないということである。盲導犬利用に，他の方法以上の利点を感じる人は，盲導犬を数代にわたり使い続ける傾

向があるらしいということである。盲導犬として利用できるのは訓練が終わってから8,9歳までの7,8年ということなので、30歳から使用しても4頭あるいはそれ以上の犬と付き合うことになる計算になる。

それぞれ性格も異なり、個性のある犬と時間をかけて信頼関係を築き、共に歩くことを選ぶのは、視覚障害を持たない私には負担に思えるが、それだけの魅力があることなのだろう。

以前は禁止されていたようだが、最近は、盲導犬使用者は盲導犬をリタイアさせたあとも、リタイア犬ボランティア（リタイアした盲導犬を育成団体から預かり、余生の面倒をボランティアとしてみる飼育者）のもとを訪ね、かつてのパートナーと会うことを楽しみにしている人も少なくないようである。

3.3 盲導犬以外の手段を使う視覚障がい者

白杖を使用する人たちは、視覚障がい者の歩行訓練を専門とする歩行訓練員の指導を受け、通学や通勤の経路を覚え、白杖を使って移動をする。また、歩行を助ける人を利用する（通常、市町村の補助あり、利用理由に制限あり。通勤等には使えず）などがある。

しかし、白杖を使用して慣れたところとの往復をする以外は、事前の予約が必要、公共交通機関しか使えない等々様々な制約がある。

いずれにしても、人間は視覚情報に多くを頼っているため、情報量のハンディが大きいことが問題として指摘されている。

4. 日本人と犬の関係

4.1 犬と人の関係

犬の祖先については種々議論があるが、現在は遺伝子鑑定の結果から「オオカミ」それも、東アジアに住んでいたオオカミということにおちついている。この東アジアのオオカミが人間と行動をともにするようになった理由については、現在も議論が続いている。この種のオオカミの中でも、人に懐きやすい種類がいて、それが行動を共にしはじめた、群れからはぐれた子どもオオカミを人間が育てたなどの諸説がある。

いずれにしてもオオカミと人間は相互依存の関係の中で、行動を共にすることとなった。人間と行動を共にし始めたオオカミ、犬の原種は人間に伴われて東アジアからヨーロッパ、アメリカ大陸と広がった。日本人とともに暮らした犬とヨーロッパに渡った犬の種は、早い段階で分化したといわれている。

ヨーロッパに渡った犬は、鳥猟犬、猟犬、牧羊犬などの使役犬、闘犬などの競技に使う犬、そして貴婦人の愛玩用と人間の利用目的に合わせて品種改良がなされた。ヨーロッパではキリスト教の教えに反するとして牛、馬等も含め品種改良が抑圧されていた時期もあった。しかし時代が下り、牛の品種改良が良質な牛肉を供給可能にすることなどの価値が認められるようになり、積極的な品種改良がはじまり、品種改良の技術も進んだ。

このような流れの中で、牛や馬、山羊などと同様の家畜として扱われていた犬も、品種改良の対象となった。

犬の場合は人間の使用目的に応じて、猟犬、鳥猟犬、牧羊犬などの使役犬、闘犬など競技用の

犬、そして貴婦人が室内で愛玩することを目的とした愛玩犬などに品種改良がおこなわれた。(ローレンツ, 1966) (林他, 2009) (田名部, 2007)

4.2 日本人と犬の関係

日本は、この家畜の扱いが欧米、そして中国との比較において異なっている。これは、日本人と家畜の関係の作り方として、現在に至る (林他, 2009)。

日本人は家畜のマネジメントが下手で、牛や馬に対する積極的な品種改良を行わず、牧畜というより狩猟採取生活を続けていたことが報告されている。これは犬についても同様で、日本の固有種である「日本犬」、なかでも「柴犬」は「犬」の原種に近い犬種である。

日本では、飼い犬は「家族」と「他人」(日本人の意識の中にある「うち」と「そと」)の中間に位置付けられ、庭でつなぎ飼いをする場合が多く、飼い犬の服従訓練(家庭犬としてのしつけ)をする文化を持たなかった。これは、欧米では犬を家族の一員(あるいは家業のための労働力)とみなし、飼い主およびその家族に対する服従訓練を行うことが一般化していることと対照的である。(林他, 2009)

この「犬」に対する意識の違いが、人間の生活を支えるために犬を利用するひとつのかたちである「盲導犬」等の補助犬に対する利用者の意識の違い、社会の受け入れ態勢に違いを生む要因になっていると考えられる。

さらに、犬を屋内で飼う文化を持たなかったことは、住居、施設等の屋内空間設計の際に、犬のスペースあるいは犬の動線を「余裕」として確保しないことを標準とすることにつながったと考えるのは自然である。また、室内の床、壁等の材料を選ぶさいに、犬を室内で飼うことによる汚れ、傷つき、犬の関節等への負担、犬の習性を考慮にいれてこなかったということでもある。(UR 都市機構関西, 2011) (SC マイスタークラブ, 2007)

イギリスでは、盲導犬を利用するようになった中途失明の男性が、「犬の面倒を見る」、言い換えると他者の世話をするという仕事を任されたことで自分に対する自信と誇りを取り戻したという事例も紹介されている(有馬, 1999)。犬を飼うこと、犬の世話をすることに対する意識の違いがあることはこのような事例からも覗かれる。

北欧の在宅ケアに関するビデオ(外山 A, 1990)には、寝たきりで1日に数回の在宅医療、在宅介護を利用している女性のベッドの足元でネコが眠っている光景が映されている。北欧の在宅ケアの状況を紹介した書籍(外山 B, 1990)には、在宅介護担当者が訪問家庭で行う仕事のひとつとして「ネコにエサをやる」、「ネコのトイレを掃除する」ことが記されている。

盲導犬を利用する文化を盲導犬先進国の欧米から取り入れるには、このように犬やネコと人の関わり方が、大きく異なっていることを前提とする必要があると考えられる。

4.3 日本人と犬の現状

ペット産業が成長産業と言われており、犬あるいはネコの飼育希望者、実際に飼育している人の数は増加している。その一方で処分場に送られる犬、ネコの数も増加している。犬の場合は飼いきれなくなって飼い主の手で持ち込まれるものがほとんどである。

飼いきれなくなる理由としては、子犬のときにしつけをしなかったため、成犬になって、噛む、

吠えるなどの問題行動をする犬を持て余す、散歩などの世話がしきれない、ワクチン接種等、お金がかかりすぎる、転居先が犬の飼育を禁止しているなどである。(飯田, 2010)

一般に犬を飼うことに関する知識も準備もないままに飼い始め、持て余して捨てるというケースが多い。

欧米での品種改良の結果、犬には種類による性格があり、飼いての状況に応じた犬種を選ぶことが必要であるが、そのための情報が十分にいきわたらないまま、ペットショップで売買されていることも問題を大きくしている。

また、犬の飼育を認めているマンションでも大きさを限る飼育規約があるケースが多く、ほとんどの場合、小型犬に限られる。

UR 都市機構関西支社は、ペット可の賃貸住宅を一部の団地で認めはじめたが、重さは 10 kg までの犬あるいは猫 1 匹のみとなっている。

5. まとめ

調査の過程で、盲導犬の普及には様々なレベルの課題があることが明らかになった。犬と人間の関係の在り方が欧米と異なることは、文化的素地として大きな影響を与えていると考えられる。このことの結果として、住宅や施設設計にあたり、犬を室内に入れることを前提とした材料選び、モジュール設定がなされてきたという面もあるのではないかと考えられる。

注

本稿の中で使用している写真は、すべて著者が撮影許可された場所で撮影したものである。

参考文献

- 有馬もと『アシスタンスドッグ』大月書店, 1999 年
飯田基晴『犬と猫と人間と』太郎次郎社エディタス, 2010 年
SC マイスタークラブ編著『ペットから見た家づくり』新建新聞社, 2007 年
関西盲導犬協会 <http://www.kansai-guidedog.jp/> 2011 年 8 月
厚労省 <http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/syakai/hojyoken/html/b04.html> 2011 年 8 月
全日本盲導犬使用者の会 <http://guidedog-jp.net/> 2011 年 8 月
田名部雄一著『人と犬のきずな』裳華房 ポピュラー・サイエンス 283, 2007 年
外山 義 自由工房(製作)『記録映画 安心して老いるために』岩波ホール(発売)ビデオ, 1990 A 年
外山 義『クリッパンの老人たち』ドメス出版, 1990 B 年
日本盲導犬協会 <http://www.moudouken.net/> 2011 年 8 月
林良博, 森裕司, 秋篠宮文仁, 池谷和信, 奥野卓司編『ヒトと動物の関係学 2』『家畜の文化』岩波書店, 2009 年
UR 都市機構関西 <http://www.ur-net.go.jp/kansai/> 2011 年 8 月
コーラント・ローレンツ著 小原秀雄訳 至誠堂選書 1『人イヌに会う』1966 年

その他の参考文献

- 井本忠夫『集合住宅でペットと暮らしたい』集英社, 2001 年
金巻とも子『マンションで犬や猫と上手に暮らす』新日本出版社, 2007 年
松井進『わかる! 盲導犬のすべて』明石書店, 2004 年